

早生まれは大人になっても損をする？ 東大教授が説く「不利のはね返し方」 | 学習と健康・成長 | 朝日新聞 EduA

山下 知子

早生まれは幼いころは不利だが、小学校の高学年ぐらいになれば気にならなくなる――。そんな印象論は誤りだとする研究が話題になっています。「生まれ月による不利は、大人になっても存在する」。7月に発表した論文で、こう指摘した東京大学大学院の山口慎太郎教授（労働経済学）に、早生まれの不利をはね返す方法を聞きました。

（やまぐち・しんたろう）1976年生まれ。専門は労働経済学、家族の経済学。「『家族の幸せ』の経済学」（光文社新書）でサントリー学芸賞受賞。男性の育児休業や保育政策などについて、積極的に発信している。

早生まれは高校入試にも影響！？

――昔から、「早生まれ」は幼稚園や保育園、小学校低学年のころは不利だと言われてきました。記者の次男（4）も3月生まれなので、気になっています。

生まれた月の違いによる成長差は、幼少期ほど大きいものがあります。4月入学で、4月2日生まれから翌年4月1日生まれを同じ学年とする日本では、「最年長」である4月生まれの子どもは相対的に体格がよく、勉強やスポーツもよくできて、リーダー的な存在になりやすい一方、「最年少」の3月生まれは何事にも遅れがちです。個人差はありますが、集団としてみた時にそうした傾向はやはり存在します。

――でも、成長すれば差は縮まってくるんですね。知人に「小学校の高学年ぐらいになれば心配ない」と聞いてホッとしていたのですが.....。

残念ながら、今回の研究で早生まれの不利は、高校入試の段階でも続いていることが分かりました。統計的な誤差を補正した上で、4月生まれと3月生まれで入学した高校の偏差値を比べると、4.5も違っていました。私たちも、こんなにもはっきりとした差があるとは思っていませんでした。

早生まれの「不利」は大人になってもなくなる

――ちょっとショックです。では、いくつになれば差がなくなるのでしょうか。

早生まれの不利は大人になっても消えません。30～34歳の所得を比較した先行研究によると、早生まれのほうが約4%低いという結果が出ています。この年齢になれば3月生まれと4月生まれで生物学的な能力差はないので、知力や体力、体格ではなく社会の仕組みそのものが、早生まれの不利を固定化する方向に働いていると考えられます。

理解の鍵は「認知能力」と「非認知能力」です。認知能力とは、IQ（知能指数）や学力テストなどで示される能力を指します。一方、非認知能力は「最後までやり抜く力」や「感情をコントロールする力」「他人と良い関係を築く力」といった能力を指します。近年の

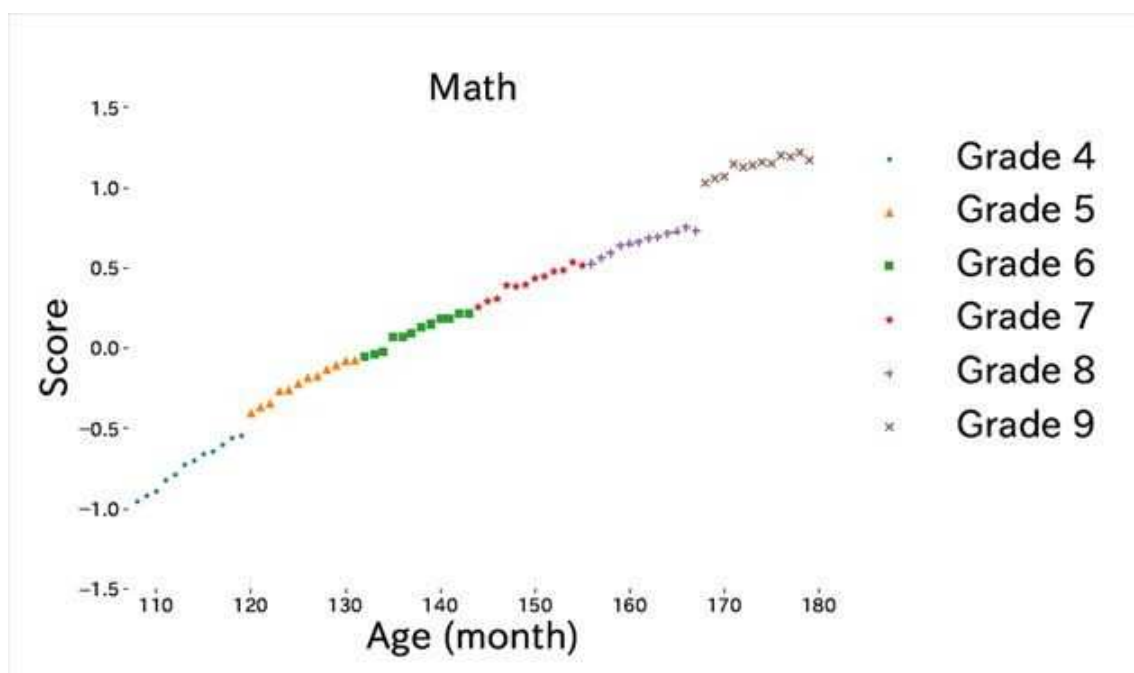
研究で、社会的に成功する人は非認知能力が高いことがわかってきています。早生まれの子どもは、同じ学年の遅生まれの子どもに比べて認知能力と非認知能力がともに低い傾向がありました。

早生まれは大人になっても損をする？ 東大教授が説く「不利のはね返し方」 | 学習と健康・成長 | 朝日新聞 EduA

山下 知子

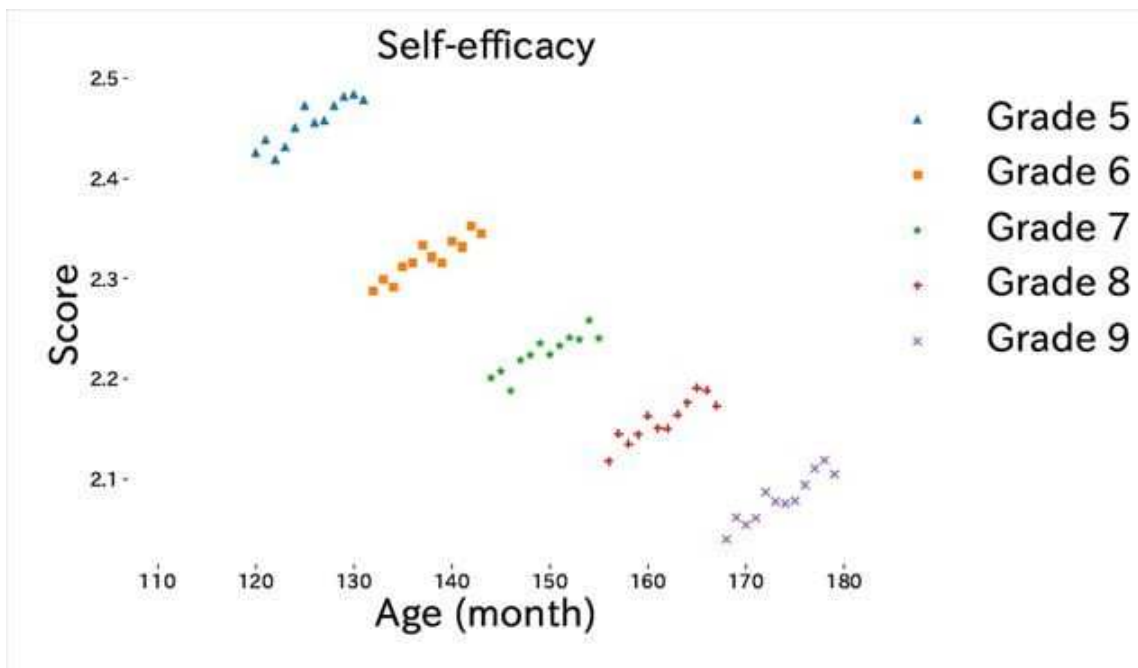
早生まれは幼いころは不利だが、小学校の高学年ぐらいいなれば気にならなくなる。そんな印象論は誤りだとする研究が話題になっています。「生まれ月による不利は、大人になっても存在する」。7月に発表した論文で、こう指摘した東京大学大学院の山口慎太郎教授（労働経済学）に、早生まれの不利をはね返す方法を聞きました。

まず、グラフ1を見てください。これは小学4年生（Grade4）から中学3年生（Grade9）を対象に、算数・数学の得点を縦軸、生まれてからの月数（月齢）を横軸にとったグラフです。同じ学年のなかでは、3月生まれの得点が最も低く、4月生まれや5月生まれが最も高くなっていますが、学年が上がるにつれて、生まれ月による差は小さくなっています。認知能力の一つである学力の差は、成長するに従って次第に縮小していくのです。



グラフ1：小学4年生（Grade4）から中学3年生（Grade9）を対象にした算数・数学の得点（縦軸）と生まれてからの月数（横軸）の関係（グラフはいずれも山口慎太郎ほか「Month-of-Birth Effects on Skills and Skill Formation」より）

次にグラフ2を見てください。これは、「ある目標を達成するために必要な行動を選び、計画通りに成し遂げることができるという自信」を意味する自己効力感をどれくらい持っているかを、同じく生まれてからの月数で比べたものです。自己効力感のような非認知能力は、思春期においては学年が進むと下がるのが一般的で、このグラフも学年が上がるにつれて右肩下がりになっています。注目すべきなのは、同じ学年内で早生まれと遅生まれを比べると、学年が進んでも両者の差が縮まっていないことです。このグラフからは、認知能力と違って、非認知能力の差は自然には縮まっていけないことが読み取れます。



グラフ2：小学5年生（Grade5）から中学3年生（Grade9）を対象にした自己効力感のスコア（縦軸）と生まれてからの月数（横軸）の関係

--では、どのような子育てをすればいいのでしょうか。

親は、数字に表れ、対策のしやすい認知能力の向上に偏って投資をしてしまうケースが多いようです。調査では、中学3年生の早生まれの生徒は遅生まれの生徒に比べ、学校外で週に0.3時間多く勉強していました。読書時間も0.25時間多く、塾に通っている率も3.9%高い、という結果が出ました。

一方、スポーツや外遊びに費やす時間が最大で週に0.52時間少なく、学校外の美術や音楽、スポーツ活動に費やす時間は、最大で0.19時間少ないという結果でした。何が非認知能力を高めるのかはよく分かっていないのですが、芸術やスポーツ活動は非認知能力の向上に関わっていると考えられています。

この結果を見ると、早生まれが不利にならないように、親や周りの人が家での勉強や読書、塾通いを積極的に促していると推測されます。そうすると当然、子ども同士で遊んだり、スポーツをしたりする時間は減るので、これが非認知能力が育ちにくくなっていることに影響している可能性があります。もともと不利な立場にある早生まれの子どもたちは、親が子を思うための「対策」によって、より不利な状況に陥ってしまっているのです。

早生まれは大人になっても損をする？ 東大教授が説く 「不利のはね返し方」 | 学習と健康・成長 | 朝日新聞 EduA

山下 知子

早生まれは幼いころは不利だが、小学校の高学年ぐらいになれば気にならなくなる――。そんな印象論は誤りだとする研究が話題になっています。「生まれ月による不利は、大人になっても存在する」。7月に発表した論文で、こう指摘した東京大学大学院の山口慎太郎教授（労働経済学）に、早生まれの不利をはね返す方法を聞きました。

――早生まれの子の親は、非認知能力のほうを考えたほうがいい、と。

長期的な成長を考えればその可能性が高いです。さきほどのグラフ1が示しているように、認知能力は生物的な成熟によって、20歳にもなれば差は目立たなくなります。体力も知力も、詰まるところ、放っておけばいずれ追いつくのです。ただ、非認知能力はそうはいかない可能性があります。焦って目先の認知能力を上げることに注力するよりも、非認知能力を高めるほうに少し力を振り向けたほうがよいと思います。

そこで大事なのは、早生まれの子に「自分はできない」と思わせないようにすることです。そうした環境を整えることが、早生まれの子の親ができることではないでしょうか。一例ですが、習い事に通わせるときも、学年ではなく能力別にクラス分けされた教室のほうがよいでしょう。そうした教室であれば、早生まれの子も学年内での差を感じることなく、取り組めると思います。

――3月末生まれの同僚は幼いころ、祖母に「比較するなら一つ下の学年としなさい。そしてたらあなたは体も大きいほうでしょ？」と言われ、救われたと言っていました。

そうした声かけは有効ですね。一見、能力が低く見えるのは学年内で「若い」からであって、その子自身の問題ではありませんから。学年内の相対的な能力ではなく、きちんと個人の能力を見ることが大切です。

早生まれは入試に加点しては？

――新型コロナウイルスの感染拡大で、9月入学の是非が話題になりました。入学の時期が変われば早生まれの定義も変わります。早生まれが不利にならない制度は考えられないのでしょうか。

政策面で考えられることはいくつかあります。アメリカやオーストラリアなどには、生まれ月などで保護者が入学時期を変更できる仕組みがあります。日本のように、生まれた日が1日違えば別の学年というように、学年を厳格に定義、運用している国のほうが珍しいです。ただ、保護者に判断を委ねると、保育料を追加で負担できない貧困層は入学を遅らせられなかったり、同じ学年内でさらに年齢差が広がったりする問題点があり、弊害もあります。

ほかにも、入試などの選抜の場面において、生まれ月を考慮した合格枠を設けたり、点数

を補正したりするといった方法があり得ます。例えば3カ月ごとに区切って、統計学を使ってフェアな補正をしたらどうでしょう。

小学校の低学年は、生まれ月によるクラス編成をしてもいいかもしれません。このころは、特に男子の体力差は歴然としているので、体育の授業に取り入れるのは有効だと思います。

早生まれの子は不利であると、教員がこれまで以上に強く認識することも大切です。9月始業の米国でスポーツクラブのキャプテンになる子の生まれ月を調べたところ、6～8月生まれが少なかったという結果が出ています。学校現場では、意識的に早生まれの子に機会を与えてみてはいかがでしょうか。

――早生まれが不利だという指摘は以前からありました。なぜ解決への動きが起こってこなかったのでしょうか。

早生まれ問題は教育学や心理学では昔から取り組まれてきた分野で、気づかれていなかったわけではありません。にもかかわらず放置されてきた原因は、いくつか考えられます。一つには、どこかで区切りをつけないといけないため、誰かが不利を被るのは仕方ない、と考えられてきたからです。二つ目は、個人差のほうが大きいためです。例えば、元プロ野球選手の桑田真澄さんは、その学年で「最年少」の4月1日生まれですが、甲子園やプロ野球で大活躍しました。こうした成功例や、「自分は早生まれだがうまくいった」という声にかき消され、統計的な差が見えにくくなっているのです。

今回の研究で、早生まれは想像以上の影響があると分かりました。原因は学年の区切りという社会の仕組みにあるのですから、完全な解決は難しくても、和らげるための施策を講じていくべきではないでしょうか。



1985年8月、甲子園球場で力投するPL学園の桑田真澄投手